

リレー随筆

「ドクターヘリ エンジンスタート!!」

鹿児島県立大島病院 救命救急センター 平田 悠哉

2021年3月21日、奄美大島のとある会場で、『NHKのど自慢』が開催された。会場には大島紬に身を包んだ者、セーラー服を着た中学生などさまざまな歌い手が集まっていた。そんな中、一際異彩を放つグループがいた。上下紺色の医療用スクラブに、肩からは医者の代名詞とも言える聴診器をぶら下げ、「医療スタッフ」と書かれた赤いストラップに名札を吊り下げた男3人組。「次は、奄美大島で研修医として頑張る3人組です、どうぞ!!」アナウンサーの紹介で3人組が舞台上に登場し、同時にバックバンドの生演奏による前奏が始まった。そして彼らは叫んだ。

「5番 HANABI ドクターヘリ エンジンスタート!!」

私は栃木県にある自治医科大学というところで6年間過ごした。鹿児島県出身であり、卒後は就職のため鹿児島に戻ってきた。そして最初の赴任地として奄美大島で初期研修を開始することとなった。これまでも親の転勤や大学の実習で奄美を訪れることはあったが、本格的に「住む」というのは初めてであり、とてもワクワクしていたのを覚えている。

私たちの就職は2020年4月で、ちょうど日本国内でコロナが流行り出した頃だった。3月末に鹿児島県内でも初の感染者が出て、県外からの渡航者や海外渡航歴のある者に対して、皆敏感になり出した頃であった。そのしわ寄せを私たちはもろに受けることになる。卒業旅行で国内、国外を思う存分飛び回ってから奄美にきた私たちは、無条件に2週間の隔離を余儀なくされたのであった。

いきなり出鼻をくじかれる形でスタートした研修医生活であったが、切磋琢磨し合うい

い同期に恵まれ、その後はとても充実した日々を送ることができた。いい意味で「ひとに影響されやすい、同調しがり」な純日本人気質なメンバーが揃った印象だった。誰かがJAL修行（たくさん飛行機に乗り、良いステータスを得ること）をするといい出したらみんなこぞって飛行機に乗り出した。またあるときは、ダイビングライセンスを取るといい出した者に続いて、みんな海に行き出した。今でも愛用しているApple watchやGo Proもその戦利品である。

そんな中、私にとってある運命的な出来事が起こる。「麻雀」との出会いだ。もともと麻雀をしてきた同期たちが楽しげにしている姿を見て、特に純日本人気質の強かった私はすぐに麻雀の世界に足を踏み入れた。そのゲームのおもしろさはやっているうちにどんどん身に染みてきた。やればやるだけ魅力に気付かされ、またさらにやりたくなる、まさに「魔」のゲームであった。仕事終わり、悪天候の休日は暇さえあれば麻雀をしていた。天気が良い休日は、日中はスキューバダイビングや釣りをし、夕方から麻雀をするという、ハードスケジュールをこなしていた。とは言っても、まだ働き始めて数ヶ月。毎日仕事でいっぱいだったことに加え、休日は海で思い切りはしゃぎ疲れて、実際は麻雀どころではないことの方が多かった気がする（それでも麻雀をして、何度か仕事に影響しかけたことは、ここだけの話である）。

奄美大島の海は本当に綺麗である。見てもよし、潜ってもよし、浮かんでもよし。しかも1年を通して比較的温暖なため、夏以外でもマリンスポーツやダイビングなどのレジャー

を楽しめる。しかし、1つだけ問題点がある。日照時間の短さだ。奄美大島は日本でも有数の日照時間が短い地域として知られている(らしい?)。思い返してみれば、あの快晴の空の下のマリンブルーの画が印象的ではあるが、たしかにそういう日は珍しい。たいていは曇天の中、ときには小雨の中を泳いだり潜ったりしていた(ダイビングでは海中にすることがほとんどであるため、あまり気にならなかったのであろう)。加えて厄介なのが、秋から冬にかけてこれが顕著になってくることである。夏は梅雨や台風シーズンでそれなりに悪天候になることが多い。秋～冬はそこまでの悪天候は少ないが、ずーっと曇りか地味な雨が降っている印象である。夏であれば暑さも相まって、多少の天候不良でも海に飛び込むこともある。秋、特に冬となると流石の奄美でもそれは躊躇われる。年中温暖ではあるものの、やはり秋～冬にかけては海離れが進んでいった。

研修医生活も半年を過ぎると、日々の業務や当直にも慣れ、少しずつ余裕のある生活を送れるようになっていた。季節も夏から秋に移り変わる頃で、徐々に海離れが進んでいた。仕事終わり、休日に隙間時間が増えた。ここで猛威を振るったのが、あの「麻雀」であった。メンツが揃う限り麻雀に明け暮れた。ときには朝まで麻雀をしてそのまま空港まで車で向かう強者もいた。いつときは麻雀に支配されたかのような生活を送っていた気がする。こういう書き方をすると、どうしても麻雀が悪いのだ、仕事もせずに遊んでばかりだのと悪い印象を持たれてしまうかもしれない。だが、各々「仕事は仕事(多少は影響があったかもしれないが)」、「遊びは遊び」としっかり割り切れていたし、何より麻雀は「交流の場」となっていた。普通なら仕事が終わって各自家に帰り、それぞれの時間を過ごすところを、仕事終わりから寝るまでの5-6時間をとともに過ごすのである。あくまでメインは

麻雀なので、雑談が多かったが、あるときは仕事の悩みであったり、またあるときは恋の相談であったりと、研修医たちの憩いの場となっていた。

そんなこんなで麻雀に明け暮れる日々を過ごしていたある日、1人の同期が興味深い話を持ってきた。奄美大島でかの有名なNHKのど自慢が開催されるのだという。それに同期3人で申し込んでみないかという誘いであった。最初に話を聞いたときは面白そうと感じた。しかし冷静になってみると、そもそも私は特別歌が上手いわけではない。他の2人は飲み会の場で歌っているのを聞いたことがある。たしかに上手いというわけではない。だが特出して上手いというわけではない。のど自慢は全員が全員出演できるわけではない。厳正なる書類選考と予選会を勝ち抜いた選ばれし20組前後がテレビ放送のある本選に出場できる。人口が少ない分、倍率はそこまで高くないと思われた。だがライバルは島人である。島人の歌唱力をなめてはいけない。これも飲み会の場で聞いたことがある。半端なく上手い。お酒の力も相まって酔いしれるレベルだ(奄美では飲み+カラオケというセットが一般的で赤の他人と飲んだり歌ったりして楽しむことが珍しくない)。たかが素人研修医が勝ち抜けるわけがない。そう思っていたが、彼からの執拗な誘いに屈し、とりあえず申し込んでみようという話になった。年が明けた2021年1月末のことであった。

麻雀に明け暮れる日々を過ごし続け(仕事もしっかりしながら)、月日は流れ3月になっていた。もうすぐ研修医2年目になるということで、1年目の受け入れ体制の準備や2年目の研修先の選択、3年目以降の専門をどうするかなど、いろいろと考え始める時期だ。申し込みから1ヶ月以上経っており、端から出られると思ってもいないのど自慢のことなんか全く頭になかった。書類選考を突破したという驚きの報告を受けたのはそんな頃だった。

まさか予選会に出られるとは。書類はもう1人の同期が作成したのだが、研修医というキャラクターと選曲（ドクターヘリがメインで描かれている某ドラマ番組のテーマ曲）を存分に押し出した文章であった。彼は口が達者で表現力もピカイチだった。彼のユニークな文章がNHKの心にヒットしたのであろう。

まさか予選会に出られるとは思ってもいなかった3人組は焦った。予選会は本番さながらのステージで実際に歌を披露しなければならない。予選会までは2週間足らず。それまでは本気で考えていなかった彼らにも、ここまで来たらと気合が入った。早速カラオケでの練習が始まった。誰もが一度は歌ったことがあるくらい有名な歌であり、彼らも普通に歌うことはできた。しかし普通ではダメだ。パート割り、ハモリなど試行錯誤を重ねた。麻雀の時間も犠牲にしてカラオケボックスに通い詰めた。本選では最後まで歌えたとしても1番のサビまで。練習でもひたすら1番だけを繰り返した。狭い密室で何度も同じイントロが流れ、それを何時間も続けた。頭がおかしくなりそうだった。試行錯誤の末、一応の型が完成した。もともとの歌唱力のなさをカバーする形で構成したわけだが、他の出場者の歌唱力がどれだけのものか。島人の歌唱力の高さについては容易に想像がついた。予選会を勝ち抜くには何か一つピースが必要だった。

それを思いついたのはとある日のことであった。あの文章が気に入られたのだとしたら、実際に研修医としてのありのままの姿で歌ったらいいのではないかと。研修医という特出したキャラを全面に押し出せばいいのではないかと。奄美群島には彼らのように病院固定の研修医がいる施設は他にない。予選会は大多数がきつと大島紬を身につけてくるだろう。そんな中で、上下スクラブに聴診器をぶら下げた姿は絶対に目立つだろう。キャラ枠として本選に行けるかもしれない。希望が少し見えてからの練習にはさらに熱が入った。残りの

期間、何度も練習を重ね、スクラブ、聴診器、名札を用意して、いよいよ予選会当日を迎えたのであった。

予選会に出場したのは約150組。コロナの影響もあり、一斉ではなく、時間を区切って何グループかに分かれていた。彼らは午後一発目の20組ほどが所属するグループだった。会場はそこまでごった返してはいなかったが、やはりスクラブ+聴診器姿は異彩を放っていた。彼らも予想通りの展開に、気持ちを昂らせながら審査会場に入った。

予選会は歌の審査と面接で行われ、同日夕方ごろに予選通過者に電話連絡があるという、一通りの説明があった後、早速予選会が始まった。彼らの出番は中頃であったため、最初は席に座って他の出場者の歌唱を見守ることになった。1人目が歌い出した。その瞬間、彼らは震えた。あまりにも上手すぎる。島人の歌唱力が凄いことは予想していたが、それは彼らの予想を遥かに超えていた。予選会を戦うライバルであるが、思わず酔いしれてしまうほどだった。と同時にとてつもない不安と緊張の波が押し寄せてきた。研修医キャラで行けるだろうと高を括っていたが、そんなものでどうこうなるレベルではなかった。そこから他の出場者の歌は耳に入ってこなくなった。そうこうしているうちに彼らの出番が近づいてきた。舞台袖に案内され、ただ出番を待った。お互い不安でいっぱいだったが、ひきつる笑顔で励まし合った。彼らの一つ前の出場者が舞台に出て歌い出した。その日一番の歌唱力だった。他に類を見ない優しい歌声、その裏にある力強さがいいバランスでマッチしている。出番直前で集中しなければいけない時間だったが、彼の歌声に聞き入ってしまった。よりによって自分達の直前に、とも思ったが、むしろ吹っ切れることができた。そして、彼らは舞台に出て行った。

気がついたら曲は終わっており、ありがとうございました～というアナウンサーの声か

した。緊張で頭が真っ白になりほとんど記憶がなかった。上手く歌えたのかもわからなかった。言われるがまま舞台下に降りた。あ～、もう終わったのか、とやっと意識がはっきりしてきた。舞台下では当日司会をされるアナウンサーが待ち構えており、30秒程度の面接があった。やはり離島の研修医3人組というところに興味を持っていたらしく、事細かに聞かれた。そして予選会は終了した。

あまりのレベルの高さに、彼らの中で予選会を通過できる可能性は限りなく0となった。でもいい思い出になったね、とお互い慰め合いながら会場を後にした。駐車場に着くと、隣であの超絶上手かった男性が一服しているところに遭遇した。話を聞くと彼は別病院の看護師をしていて、アマチュアではあるが歌手を目指しているとのことだった。ともに離島で働く医療従事者ということで話も盛り上がり、最後は社交辞令的に互いの健闘を祈ってお別れした（このとき彼らは、後にこの看護師が本選で優勝することを知る由もなかった）。

予選会も終わり、その後どうするか、一応電話連絡を待つとしてどこで待つか。答えは決まっていた。彼らはいつもの雀荘で麻雀をして待つことにした。久しぶりであることに加え、肩の荷が降りた後の麻雀は、半端なく楽しかった。電話連絡のことを忘れて夢中で牌を打っていた。

麻雀を打ち始めて3時間ほど経った頃にその知らせは来た。予選突破の報告である。まさかの展開に電話中であつたがお互いジャンプして喜び合った。翌日の本選の詳細をメモして電話が切れた瞬間、叫び合った。そして他の同期や親族、友人たちへの自慢出場の一報を入れた。一通り作業が済んだところで、途中で止めていた麻雀を再開した。その日はいつもより早めに切り上げた。

本番当日。昨日までの緊張や不安はなく、心は楽しさでいっぱいだった。朝からリハースルを繰り返し行い、生放送のテレビ番組収

録の大変さを知った。途中、例の看護師さん（当然のことながら予選は突破している）と再開し、今度こそは健闘を誓い合った。

テレビ収録が始まり、彼らの出番は比較的早めに来た。「次は、奄美大島で研修医として頑張る3人組です、どうぞ!!」の紹介で彼らは舞台に登場した。と同時にバックバンドの生演奏による前奏が始まった。「5番 HANABI ドクターヘリ エンジンスタート!!」こう叫んで歌い出した。結果は鐘2つで不合格。サビまで歌い切れなかったが、その後も彼らの顔から笑顔が消えることはなかった。最終的には不合格ながら、やはり研修医キャラが立ったのか、特別賞を受賞した。最高の思い出である。その後はしばらく病院中で時の人となったのもいい思い出である。

今、締め切りに追われながら原稿を書いているのだが、今日が2022年3月21日。あれからちょうど1年経ったのかと思うとなんだか感慨深いものがある。あと10日足らずで初期研修は終了し、私たち3人はそれぞれまた別のところで研修を行う。私は1人奄美大島に戻り、今度は救急医として勤務する。あの頃はあれだけ叫んでおきながらまだドクターヘリにすら乗ったことがない青二才であった。あれからまだ1年しか経っていないが、少しは成長できたような気もする。しかし、ここからが救急医としてのスタート、本番である。あの頃の熱い情熱を忘れずに、奄美の空を飛び回れたらと思う。10日後には早速奄美でのヘリ勤務が始まる。それまではあの曲を聴きながらモチベーションを高めることとしよう。胸ポケットに入れた無線機から出勤要請のコールが鳴ってドクターヘリに飛び乗る姿を夢見て。

「ドクターヘリ エンジンスタート!!」

次号は、鹿屋医療センター 栗林 完先生のご執筆です。
(編集委員会)